

看護師からの輸血療法におけるチーム医療への招待 躍進する臨床検査 ～チームで取り組む輸血医療～

◎学会認定 臨床輸血看護師 坂田 幸代¹⁾
奈良県立医科大学附属病院 婦人科病棟¹⁾

医療現場において、様々な領域で「チーム医療」の重要性が唱えられている。

医療安全・感染管理・栄養管理・創傷管理（褥瘡回診）などにおいて、医師・看護師・薬剤師・臨床検査技師などの多職種がそれぞれの専門性を活かして、目的と情報を共有し、業務を分担しつつも互いに連携し、様々な方向から医療現場を評価し、患者の状況に的確に対応した医療を提供している。

輸血医療においても、安全で適正な輸血医療の実践のためには、輸血医療に携わる医師・看護師・検査技師・薬剤師がその高い専門性を用いて業務を分担し、連携・補完し合い、輸血管理及び実施体制を構築するチーム医療が重要である。私の臨床輸血看護師としての活動を紹介し問題点を共有することで、看護師としての立場から臨床検査技師の皆さんをチーム医療へ招待したい。

1. 私が学会認定・臨床輸血看護師として行っていること

輸血部自己血室で勤務することがなければ、輸血療法をここまで意識することがなかったと思う。病棟で勤務していると必要に応じて輸血療法が行われているが、そこでは1面を見ているだけであった。「善意の献血が患者の命を救う」「貴重な血液を大切に扱い、早く患者に元気になってもらいたい」そのような気持ちで輸血看護を行ってきた。自己血室で勤務することで輸血を準備する側の努力や苦勞を知ることになり、さらに輸血療法についての理解が深まった。また、学会認定・臨床輸血看護師の資格を受けたことにより輸血医療を広い視野で見ることが出来るようになった。

まず個人レベルでは、所属部署での勉強会を開催し、身近なスタッフに対して輸血療法についての正しい知識と技術を教育することから始めた。血液製剤が輸血部以外の部署での一時保管が出来なくなった理由や搬送時に起こりやすいインシデント、副作用発生時の対応、輸血記録についてなど、決まっているからするのではなく、必要性を説明することで理解に繋がった。

輸血実施記録については、電子カルテの更新に伴い記録しやすい形を検討している。

さらに病院レベルでは、当院の輸血関連の認定看護師（臨床輸血看護師、自己血輸血、アフエレーシス）は7名になったため、本年4月に院内で輸血看護師会を立ち上げた。輸血部に所属している4名を中心に臨床輸血技師とともに、今年度からの新人看護師集合教育の時間を利用して輸血看護教育に携わっている。現在「輸血看護について看護師の困っていること」の調査を計画しておし、新人だけでなく院内全体への教育活動につなげていきたい。

2. 看護師から臨床検査技師とチーム医療で連携したいこと

- 1) 輸血療法について、技師からは準備・管理について、看護師からは副作用を含めた看護についての連携した教育活動を積極的に行いたい。
- 2) 合同で院内ラウンドを行うことで、実際の使用する現場を視察し安全性を担保する。また、問題点を把握することで、輸血医療の改善につながる。
- 3) 看護師にも輸血療法に関連したトピックスを提供してもらい、広く院内に広報したい。
- 4) 輸血療法に関与している臨床検査技師は、輸血製剤の取り扱いやそれぞれの製剤の特性を理解されているエキスパートである。副作用や輸血後感染などについての対応など、専門知識を活かして活動するため、病棟や外来へ積極的に出てきてほしい。

チーム医療は、医師・看護師・技師などそれぞれの強みを生かして患者のために尽力し、それぞれの役割と業務を理解することでより安全に安心してそれぞれの業務を遂行できる。

それがチーム医療の醍醐味であり、より良い医療に繋がるもの考える。